

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 29 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520608

研究課題名（和文）学生＝社会人が交流する場としての英語授業の構築ならびに教材開発

研究課題名（英文）Development of English Teaching Material and Model for Interaction of Students as Working People in the Classroom

研究代表者

鈴木 章能（SUZUKI AKIYOSHI）

甲南女子大学・文学部・准教授

研究者番号 70350733

研究成果の概要（和文）：インターネット上に“E-Job 100”というウェブサイト構築し、日本の様々な職種における英語使用の現実を学生に見せることで、英語学習の動機づけ強化を行った。同ウェブサイトには、日本の様々な職種における英語使用に関する場면을撮影・編集し、動画として掲載した。また、教室を様々な職種の人々が集まる社会と見なし、英語によるコミュニケーションを通して、英語力と人格の向上を促進する授業案を構築した。

研究成果の概要（英文）：I made the website “E-Job 100” (<http://e-job-100.sakura.ne.jp/>) and succeeded in increasing the motivation of Japanese college students for learning English by showing them the reality that English is used in various occupations in Japan. The website contains video recordings of scenes in which English is used in various work places in Japan. The classroom is regarded as a microcosm of society where people of various occupations are, and students learn English and develop their personalities through communication in English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：英語教育

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、キャリア教育、モチベーション、英語教材、マルチメディア

1. 研究開始当初の背景

(1) 学生がどうすれば英語を学ぶ意欲を持つことができるかという問題意識から出発した。

① 英語については、グローバル化時代の現在、大企業や一部の企業における英語の重要性がマス・メディアによって報じられている一方、学生が将来就きたい職場は職種や企業規模において多様性があるため、わが国の

おかれた特別な状況、つまり、それを使わなくても日常生活に支障をきたすことはないという暗黙知と、自分が将来就く職業では英語を使用しないという思い込みのもとに、多くの学生が英語を学ぶことについて懐疑的である。また、こうした現状に対し、教員側も学生に対して英語学習について説得力のある具体的な論拠を示せていないのが実情である。

②一般的に英語使用が当然と考えられる職種を除いた45社・職種(回答40社・職種)に行ったアンケートでは、英語を全く不要とするのはわずか1社であった。この調査から、現実の社会では、仕事の中で英語が必要な場面は学生が思う以上に多く、英語ができなければ多くの職業において支障をきたす場合が少なくないことがわかった。

(2) 上記のことを受け、英語学習における学生たちの動機形成には、実社会の様々な仕事現場において英語がどれほど必要なものなのか、ということをもっと具体的に認識させることがもっとも効果的であろうと考え、英語の必要性を具体的に実感できる教材とそれを活用した授業案を構築することが必要であるとの結論に至った。

2. 研究の目的

大学へ入学してくる昨今の学生は、映像(ビジュアル)世代と呼ばれるぐらい“映像で感じる”という傾向が顕著である。同時に説得されることを敬遠する傾向もみられる。従って、「英語は社会へ出てから必要である」とか「英語学習を通して異文化に触れ、異なる価値観を持つ者を認められるように」と説得するだけでは、あまり功を奏しない。加えて、価値観が多様化し、自分探しと連動した職業選択を行う傾向にあるため、彼らの希望する職業は多種多様である。

本研究は、このような昨今の学生たちに対し、英語を使用する様々な仕事現場を具体的に映像で見せ、卒業後の職業生活において、ほとんどの学生にとって英語が必要になるということを実感させ、英語学習の目的作りと強い動機づけを行い、さらに自らの職業選択への意志形成をも行うことを目指した。

そのために、多様な仕事現場での英語使用に関する動画教材を作り、キャリア教育と結びつけ、英語学習の目的作り、動機づけ強化、スキルアップ、将来設計を同時に進行させるWeb教材を構築するとともに、教室を1つの社会として英語力を向上する授業案を構築することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 日本における様々な職種における英語使用実体の調査を増加する。職種は、旧キャリアマトリックスの職業一覧を参考にした。

(2) インターネット上で、職種別の英語使用実体を文章とともに動画で見られるようにし、学生が自分の将来計画を英語学習の必要性への納得や計画と連動して行えるウェブサイトを作る。

(3) 動画作りについて

①仕事で英語の必要性を回答した職種のう

ち、学生に人気のある職種も考慮しつつ、取材可能な回答を得た仕事現場へ赴き、英語の使用実態について詳しいヒアリングを行う。また、実際の英語使用場面やインタビュー等をビデオに収め、それを編集し、ウェブサイトで閲覧可能とする。動画はNTTコミュニケーションズのストリーミングサーバーを使用した。

②動画撮影のために訪れる会社は、一部の地域だけで仕事上英語が必要であるとの誤解を受けないようにするため、できるだけ地域を拡散させる。

③英語がなぜ、いつ、どこで、どのような場面でもどのように、どのようなスキルが必要なのか、学生が具体的に理解できるような動画を作る。

(4) 教材サイト作りと授業案の参考

中国人20,000人の英語使用実態調査から教科書を作った広東外語外貿大学の李筱菊名誉教授から知見を得、教育理論は奈良女子大学の杉峰英憲教授から知見を得て行う。

4. 研究成果

(1) ウェブサイト教材(2009~2011年度)

① 概要

英語使用実態について、104職種のページを作成した。各職種ページには、英語使用の実態をアンケートし、それに基づいた報告を文章で概略してある。そして、104職種のページのうち、47職種53種類の編集済み動画をウェブ上で閲覧できるようにした。また、実際の仕事で使用しており、授業に使用するために配分していただいた資料のうち、ウェブ上に掲載許可を頂いたものは、リンクや写真で見られるようにした。

② 掲載職種

職種は、学生が興味のある項目(例「美容系」等)に従って選べる「簡易職業表」と、厚生労働省作成の職業一覧を基にした「職業表」から選択できるようにした。作成した104職種の一覧を「簡易職業表」における一覧項目に従って下に示す。(右肩に*があるのは動画が見られる職種である。*の数は閲覧可能な動画数に一致する。また、実際の「簡易職業表」では、職種によって複数の項目にまたがって掲載されているものもあるが、その種のものには先に掲載されている項目でのみ示し、その他の項目では省略してある。)

「一般的な企業(いわゆるサラリーマン)」
一般的な企業(いわゆるサラリーマン)のまとめ/加飾フィルム製造*/建設機械メーカー/コンピューター・メーカー/イベント業/おもちゃ・玩具メーカー

「お金に関する職業」

税理士/生命保険・損害保険職/銀行/給与

処理専門家*／郵便局事務員*／会計士／

「運輸・通信の職業」

引越し業／鉄道運転士／地上モニター／運行管理者（航空機）・ディスプレイ／CA(フライトアテンダント)／タクシー運転士／バス運転士／パイロット*／郵便局集配人／駅務員

「小売業」

土産屋（駅）／パレエ衣装販売店／書店店員／量販店店員*／工具販売業*／スポーツ用品店／携帯電話販売／カーテン屋店員／コンビニエンスストア*／中古車販売業*／生活雑貨屋／電化製品店店員／自転車屋

「医療関係」

カウンセラー*／歯科医*／整体師／理学療法士／医療事務*／看護師**／薬剤師*／医師**

「土地・建物」

不動産ディベロッパー*／ゼネコン（大・中・小問わず）／不動産業*

「美容・ファッション・かわいい系」

化粧品開発・貿易販売業*／繊維業（ファブリック・テキスタイル）／ダウン(羽毛)製品加工・販売業*／リネン業／ラッピングデザイナー*／アパレル製造（フェイク・ファー）*／プラスチック雑貨・ファンシー雑貨企画開発・製造業*／美容師**／ネイルアーティスト*／エステティシャン*

「食べ物系」

洋菓子店*／寿司屋*／飲食接客業*

「もの作り・組み立て・設置」

電子部品・プラスチック備品製造業（部長級）／自動車部品製造・保全*／環境ビジネス（太陽電池設置）／金属部品工場／ラッピング資材製造販売業*／印刷業（出版）*／鋳造業*／ライン従業者

「起業・経営者」

ノマド・スタイル（起業）*／印刷・出版*

「コンピューター系」

Web 運営・管理サービス*／Web デザイン*／システムエンジニア（開発）*／コンピューター・メーカー／エンジニア(サポート) <コンピューター>*／Web 制作*／ゲーム制作

「公務員」

議員／警察官／公務員（市役所）*

「語学専門職」

貿易業／通訳／翻訳家

「ホテル・旅行系」

コンシェルジュ／旅行業

「専門・技術的職業」

スマートフォン・アプリ・コンテンツ開発*／弁理士／自動車部品開発*／電気工事施工管理技士*／自動車教習所教官*／介護サービス業／弁護士／航空機技術者／農業技術者／自然科学系研究者／人文・社会科学系研究者

「デザイン・絵・映像・音楽・芸術・スポー

ツ系」

音響デザイナー*／映像編集者*／映像撮影者／デザイナー（紙類）／盆栽家／自動車レーシングチーム／建築デザイナー****／スポーツ用品店／ミュージシャン*

なお、職種の中には、通訳や翻訳業など、英語を用いると多くの人が考えている職種も若干掲載した。取材を通して、多くの職種の人々が、英語は必須であるが、英語だけでは仕事にならず、英語で「何」をするのかという部分で知識やスキル、教養、人間性が大切であると述べた。このことを、各職種ページにテキストならびにインタビュー動画で示す中、英語だけあればできると勘違いされがちな職種について、英語以外の学びの大切さを知らせる必要があると考え、通訳や翻訳業についても敢えて掲載することとした。

③ 動画について

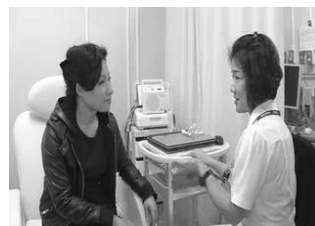
動画には大きく5種類ある。一つは、英語を実際に使用しているシーンを撮影し編集したものである。顧客の撮影許可を頂いたときは、そのまま現場を撮影したが、通常は顧客を撮影することができないため、非日本語者に顧客役をお願いし、仕事現場での英会話場面を再現し、撮影した。顧客役となる方は、様々な国の方をお願いした。英語は非英語圏であるアジア等の国々との会話にも用いられている現状を踏まえ、英会話と言えは英米等の人々との会話という、学生が抱きがちな偏見を除くための工夫である。

二つ目は顧客役を用意できない場合での英語使用場面再現である。普段英語が必要となる代表的な場面を再現してもらった。

三つ目はインタビュー動画である。職業の内容概略、英語がなぜ、どこで、どのように必要であるのか、事例を含めて具体的に語ってもらうことで、英語を使用した仕事再現場面と同様の具体性が表現できるようにした。

四つ目は、音声だけのものである。店内や社内撮影禁止の場合は、音声のみで掲載した。

五つ目は、寸劇タイプである。仕事場を撮影できない職種において、仕事現場での英語使用再現の許可をもらったものについて採用した方法である。



動画例 1. 看護師と中国人



動画例 2 ミュージシャン(インタビュー)



動画例 3 加飾フィルム製造業の会議における日本人従業員とフィンランド人



動画例 4 ウェイターとネパール人



動画例 5 医療事務員とサウジアラビア人

④ ミッション

掲示資料を含め、ページ内のテキスト部分には「ミッション」を書き、同職種における英語使用を巡り、学習者が具体的な練習をできるようにした。一種の授業案の素地にもなると考える。

⑤ リンク

英文履歴書の書き方や英語面接、資格系のリンクを貼り、学習に資するようにした。

(2) 動機づけ強化

本研究では、学習者が将来就きたい仕事をホームページ上で選び、上記の職種別英語使用の実態を知ること、英語学習の動機づけ強化をはかり、同時に、教室を一つの社会とみなすことで様々な職業に就く社会人と多様に触れ合う中で、英語コミュニケーション力を高めていく授業案を考えた。

まず、動機づけの強化であるが、その効果について、最初の授業で動画を見せる前にアンケートを行い、動画を見せた後に再び同じアンケートを行い、学習者の情意的変化を測った。アンケートの内容は、「日本で生きていく限り、自分を含めて英語は必要か」、「英語は何のために学ぶのか」の二つである。回答は自由書式である。対象は大学2年生(工学部)30名(17名+13名)、大学1年生(看護学部)23名、大学1年生(英文学科)26名である。アンケート結果はまとめると、以下の通り、学科の別を超えて、ビデオ映像を見る前と見た後では明らかに情意的領域面における興味と必要性の構造変化が起こっており、e-job 100が英語学習の動機づけ強化に大きな効果を持っていることがわかる。なお、下表の「英語必要性」の「消極派」は「1割ぐらいの人は必要」などのもの、また「学習目的」の「積極型」とは「必修科目であるから」などのもの、「不明型」とは、英語の必要性を主張しつつ、その目的が「Tシャツの英語ぐらいは読めるようにしたい」といった、英語が使えるようになるという目的からかけ離れたもの、「積極型」とは「自分の具体的な将来のため」を意味する。

【工学部】	英語必要性	学習目的
動画視聴前	必要 3人 不必要 27人	積極型 0人 消極型 30人
視聴後	必要 30人 不必要 0人	積極型 30人 消極型 0人
【看護学部】	英語必要性	学習目的
動画視聴前	必要 16人 不必要 7人	積極型 10人 不明型 6人 消極型 7人
視聴後	必要 23人 不必要 0人	積極型 23人 不明型 0人 消極型 0人
【英文学科】	英語必要性	学習目的
動画視聴前	必要 9人 消極派 7人 不必要 10人	積極型 23人 不明型 0人 消極型 3人
視聴後	必要 26人 消極派 0人 不必要 0人	積極型 26人 不明型 0人 消極型 0人

E-job 100は他の10大学の英語教員にも意見を求めたが、いずれも学習者の動機づけ強化に大きな効果があったという回答を得た。

(3) 授業モデル1(2009年度)

授業は英会話の授業で、受講者は大学2年生17名、学部は工学部、英語力としては、TOEIC300点台の学生である。基礎にした教育理論はC.ロジャーズの「学生中心教育」である。最初の授業では、英会話はだれもできなかった。E-job 100によって学習の動機づけを強化した後、次に記す授業を行った。なお、学習者に、あらかじめ、将来なりたい職業に

について尋ねてみたところ、受講者 17 名の希望職種は以下の通りであった。システムエンジニア 5 人／パイロット 1 人／銀行員 1 人／弁理士 1 人／車屋 1 人／警察官 1 人／造船業 1 人／建築士 2 人／インテリアコーディネーター 1 人／イラストレーター 1 人／宅急便ドライバー 1 人／宮大工 1 人。

セミスター最初の授業で、教師は人を紹介する文例パターンを用意する。まず、教室の受講者が互いに趣味等、自由に質問をし、クラスの仲間を紹介する英文を書き、教師がそれを添削する。次に、添削済みの英文を学習者は暗記し流暢に言えるようにする。次に、英文をいちいち書かなくても、暗記文を用い色々なものが紹介できるよう、教師がトピックを変えて発話を誘導する。この後、ペアを作り、覚えた英文を互いに発話させあう。聞き手側には相手が言っている内容をメモにとるなどして、まとめさせ、それを英語で発表させる。ペアを変えて、これを繰り返す。さらに、教師が学習者に質問文の例を教え、聞き手側に相手が言っている内容に即した質問を 3 つさせ、話し手が質問に答えるようにする。このとき、聞き手側には話し手側が暗記した文も暗記させる。相手の職務内容を知ることによる学習者の社会化と、社会化を通じた英語によるコミュニケーションの円滑化を狙った。なお、自分で作文した英文を暗記する方法を採った理由は、自分で書くことができる英文はそれほど大きな困難を伴わずに暗記できるためであり、また、学習者がそのことを知ることによって安心感のもとに学習を進めていけ、学習者全体の学習促進に効果的であるためであり、加えて、学力差のある個々の学習者に対応した授業を行うためである。もちろん、学習者自身が考える英語を暗記しているだけでは、学力は向上しない。そこで、教師が必ず英作文を添削し、文法等のミスを直すほか、個々の学習者の学力を考慮した上で難易度の少し高い英文を覚えさせていく。また、このことによって、学習者が e-job 100 を通して得た外発的動機づけを内発的動機づけに連結し、かつ、内発的動機を維持するように努めた。

ここまですを 1 セットとし、暗記文を変え、同様のペアワークを繰り返していく。2 セット目からは、暗記文を作る際、自分の仕事で英語が必要になる場面について e-job 100 のサイトで確認するか、教員に質問、あるいは自分で調べて考え、その内容を英文にし、暗記する。覚える英文の作成時には、自分の専門分野を相手にどのようにわかりやすく説明するかを考えさせることに留意した。聞き手側には、わからない内容を尋ねる文を教えて質問させ、話し手側には、説明に窮することがあれば、絵を描いて説明するなど、一つのことを異なる言い方や方法で説明できる

ようにさせた。教師は、学習者が英語を話しているとき、教室を回り、発話に困っている学習者を援助したり、発音等の誤りを正したり、ときには、会話に参加する。これは 1 セット目からセミスターの最後まで行う。

セミスターの最後には、教室内の 3 人を順番に尋ね、教師が決めたミッションをそれぞれの所で遂行し、3 カ所で得た内容ならびに、ミッションの結果を教師に見せにくる活動を行わせた。例としては「イラストレーターのところへ行き、ポスターのデザインをしてもらう→警察へ行き、郵便局への道案内をしてもらう→郵便物を配達してもらう」、「システムエンジニアに、商品の案内を聞き、一番値段の高いものを買う→別のシステムエンジニアのところへ行き、仕事の内容について聞く→ネットブックを買ってくる（商品の説明を受け、値段や特長を聞き、何をいくらか買ったのか報告）」などである。

話し手側が何かの話をするときは、最初に配布した英文パターンに即し、必ず三つの内容や事項について述べ、三つの内容や事項についてそれぞれ三つの特徴や考えを述べさせた。なお、聞き手側の質問やミッションは教員があらかじめ決め、学習者に指示する。その際、教員は学習者が選択した職種やそれまでの学習の過程から逸脱しない範囲での質問やミッションを考える。話し手側には、何を尋ねられるか、秘匿にした。また、同じ質問やミッションを聞き手側から受けても、話し手側は同じことを答えたり行ったりしてはいけないこととした。さらに、同職種を選んでいる学習者には、それぞれ仕事で扱っている範囲が異なる設定にした。教師もいくつかの職業人になって会話に参加した。

学習者は、先に述べたように TOEIC300 点台の学生ばかりで、当初は学習の動機づけも低く、英語の会話はまったくできなかったが、e-job 100 を参照することで動機づけが強化されるとともに、本授業を通し、突然英語で尋ねられても、英語で答えたり、説明したりすることができるようになり、英語だけによるコミュニケーションが教室内で行えるようになった。

(4) 授業モデル 2 (2010 年度、2011 年度)

E-job 100 に掲載するビデオ撮影を行っているうちに、英語が職務上ただ使えるだけでは不十分であるとの知見を得た。コミュニケーションは他者と情報を共有し、他者の理解を手助けする。しかし、そこに他者への配慮がなければ、それはコミュニケーションではなく、一方通行的なモノログに過ぎない。他者への配慮や共感・理解は、仕事現場で重要であるばかりか、人として生きていく上で大切なことである。人間は、他者への配慮や共感・理解を、言語で行うことができる。従

って、言語教育では、学習者に他者への配慮や共感・理解も教えることが重要になる。この意味で、英語教師は、学習者の英語によるコミュニケーション練習を通して、彼らの人格の向上促進にも務める必要がある。つまり、英語教育は全人的教育であるべきという結論に至った。

こうした全人的英語教育を実践するにあたり、李筱菊の教育理論を参考にした。学びの場では、学習者が中心となり、英語を用いた活動を通して、英語を学んでいくが、教師は言語能力、思考能力、感性の能力の発達を常に忘れず、学習者の学びと人格の発達を促進していく。具体的には、学習者に他者の感情や思いについて考えさせ、他者を配慮する視点から、英語表現や文法、単語等の意味を理解させる。例えば、謝罪表現について、色々な場面を提示し、「あなたならこのとき、どう謝ってほしいか」と学習者に考えさせ、様々な謝罪表現を情意に結びつけた形で教え、場面に適した謝罪表現や単語、論理展開を学習者に取り入れさせ、練習させていく。こうした方法を先の「授業モデル 1」に取り入れて行うことで、人格の向上とキャリア教育に連動した英語教育を展開する。

本授業モデルを 2011 年度、英文学科の 1 年生に行った。TOEIC スコア平均 400 点代で当初は英語が話せる者はいなかったが、授業の最後には相手を配慮する言葉を用いながら英語によるコミュニケーションを行えるようになった。2010 年度には看護学部 1 年生に行った。文法と文章構造の授業であったが、他者への配慮を積極的に英文に表現する、また読みとれるという効果を得た。

(5) 国際性

上記成果を 2010 年、アメリカで開催された国際学会で発表した。世界の研究者による公開匿名審査が 8 項目（創造性、実用性等）に渡って行われ、総合平均点で約 8 点（10 点満点）を収め、世界中で 131 人の発表者中、6 人の日本人発表者の一人に選ばれた。審査の中には「新鮮なアイデアであり、パイオニアとして研究を進めてほしい」という意見もあり、本教育理論・実践・研究が国際的に有効であることが裏づけられた。また、2011 年には中国の吉林大学で本研究について同大学の英語教員向けの講演を行なった。同大学において外国語専攻以外の学生に最近見られ始めるという英語学習の意欲低下に歯止めをかける効果的な方法であると高評価をもらった。本研究は、日本のみならず、日常生活で英語を使用せず、英語を外国語として学習する国々の学習者にも、将来の具体的な英語使用場面を見せ、英語を身近なものとして認識させることによって、学習の動機づけ、人格、ならびに英語力を向上させ得る効果的な

方法であると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

Akiyoshi Suzuki, “The Fact Speaks for Itself”: Humanistic English Education with “e-job 100” Internet Project. *IMSCT’ 10 Proceedings* VOL. I. (2010): pp. 259-264. 査読有。

〔学会発表〕（計 5 件）

Akiyoshi Suzuki, “Comparative Study on the Problem of Motivation between Chinese and Japanese English learners and E-Job 100 as a Solution”. Lecture on English Education”. The Society of English Teaching at Jilin University, Jilin University, Changchun, Jilin, China, 2011.

〔図書〕（計 2 件）

Akiyoshi Suzuk, Teresa Kuwamura et. al., *WorldCALL: International Perspectives on Computer-Assisted Language Learning*. (joint authorship). New York: Routledge, 2011. pp. 202-211.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.e-job-100.sakura.ne.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 章能 (SUZUKI AKIYOSHI)
甲南女子大学・文学部・准教授
研究者番号：70350733

(2) 研究協力者

杉峰 英憲 (SUGIMINE HIDENORI)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：70025112
(H22 まで研究協力者として参画)

桑村 テレサ (KUWAMURA TERESA)
大阪産業大学・教養部・非常勤講師
(H21 から研究協力者として参画)

李 筱菊 (LI XIAOJU)
広東外語外貿大学・外国語学院・名誉教授

鄧 小涛 (DENG XIAOTAO)
広東外語外貿大学・外国語学院・専任講師
(H21 から研究協力者として参画)